

発達の偏りを有する子どもをもつ母親が捉える祖父 母との関係性：発達障がい特有の行動特徴について 話すときの難しさの視点から

丸山, 沙紀
九州大学大学院人間環境学府

尾方, 里帆
九州大学大学院人間環境学府

鈴木, 智子
九州大学大学院人間環境学府

岩男, 芙美
九州大学大学院人間環境学府

他

<https://doi.org/10.15017/1911194>

出版情報：九州大学総合臨床心理研究. 7, pp.27-36, 2016-01-20. 九州大学大学院人間環境学府附属総合臨床心理センター
バージョン：
権利関係：

発達の違いを有する子どもをもつ母親が捉える祖父母との関係性 —発達障がい特有の行動特徴について話すときの難しさの視点から—

丸山沙紀 (九州大学大学院人間環境学府) / 尾方里帆 (九州大学大学院人間環境学府)

鈴木智子 (九州大学大学院人間環境学府) / 岩男美美 (九州大学大学院人間環境学府)

遠矢浩一 (九州大学大学院人間環境学府)

要約

本研究では、発達の違いを有する子どもをもつ母親を対象に、母親が子どもの発達障がい特有の行動特徴について祖父母と話す時の難しさについて、続柄間での比較を通して検討した。母親には質問紙調査法を実施した。その結果、母親にとって祖父母に話す時に難しいと感じる発達障がい特性が特定の存在したが、話す際の難しさは、子どもが祖父母と会う頻度や母親が子どもの発達障がい特性について祖父母に話す機会の多少とは関連がないことが示された。母親は、実父母に対してよりも義父母に対しての方が、子どもの発達障がい特性を話すことに難しいと感じており、そうした特性を話す機会も実母が最も多いことが示唆された。このことから、母親が祖父母に話す時に感じる難しさは、祖父母と子どもや祖父母と母親の関わりのみならず、母親が捉える祖父母との関係性によって生じるものと考えられた。今後、発達障がい児をもつ家族支援は、母親と祖父母との良好な関係性と理解を促すことが重要であると考えられた。

キーワード：発達障がい、母親、祖父母

I 問題と目的

都市化や核家族化および少子化の進行にともない、子育て不安を訴える母親や育児ノイローゼに陥る母親が増えてきているとの指摘がある（八重樫・小河，2002）。そのため、母親の子育て不安や子育て負担感を軽減するための子育て支援の1つとして、中・高年齢層の豊かな子育て経験を生かした子育て支援が重要であり（八重樫ら，2003），その点で祖父母の存在は重要であると考えられる。しかし、今野（1982）が言うように、子どもの発達の過程において老人、特に祖父母と関わる機会は少なくなっている。

今野（1982）によれば、祖父母が孫の子育てに関して果たすことのできる役割は、孫と一緒に遊ぶ、幼稚園や学校などへの送り迎え、仕事等で忙しい両親に代わって食事の世話やお風呂に入れるといった生活面での援助など多岐にわたる。また、八重樫ら（2003）は、子育て中の母親にとって、祖父母はインフォーマルな社会資源として重要で

あると述べている。ここで言うインフォーマルな社会資源とは、祖父母による母親の子育てへの不安や負担についての相談相手、母親の精神面でのケア、子育てに対する情報源などである。つまり、祖父母が果たす役割は、孫に対して果たす役割に加えて、母親に対して果たす役割も大きいといえる。

しかしながら、発達障がい児の母親と祖父母との関係性について見ると、岩崎・海蔵寺（2007）は、特に祖父母は、身近で子どもの行動や親の対応を見る機会が多い一方で、障がいに対する知識が少ないことが多く、親の育て方に対して誤解や非難をしやすいと指摘した。この誤解や非難の背景には、高橋・増渕（2008）が、アスペルガー症候群等は、その障がいの持つ独特の困難が理解されにくく、「頑張れば普通になれる」、「怠けている」、「先生や親が甘い」などの認識が依然として払拭されず、本人の抱える困難は「わがまま」「自分勝手」などと誤解されやすいと述べているように、

発達障がい周囲から見えにくい障がいであることも少なからず影響していると考えられる。つまり、子どもの障がいの見えにくさが、母親にとって祖父母から子どもの障がいへの理解が得られにくい、誤解されやすいなどといった、母親の困り感を生じさせる原因の1つになっていると考えられる。

以上より、母親にとって祖父母は子育てについての相談相手や精神面でのケアなどにおいて重要な役割を果たす反面、発達障がい児の母親にとっては、祖父母との関わりにおいてそのような役割を得られにくいと推察される。

したがって、本研究では、発達障がい児および発達の偏りを有するためにそうした特性を示す子どもの母親を対象に、母親が祖父母と子どもの発達障がい特有の行動特徴について話すときの難しさに焦点を置く。その中で、続柄（実父、実母、義父、義母）間での難しさの違いの検討も行う。なお、本研究では、特に行動特徴が顕著になる時期であろう小学生の時期に限定して、どのような点で難しさを感じているのか明らかにする。そうすることにより、母親の祖父母との関わり方について検討し、支援の一助とすることを目的とする。

II. 方法

調査対象：Z大学Yセンターにおいて、筆者らの実施する集団活動を通じた対人関係スキルの発達支援プログラムであるグループセラピーに参加している子どもの母親37名

調査時期：X年12月上旬～X年12月下旬

調査手続き：質問紙調査法を実施した。グループセラピーの親の会にて、「祖父母（母親から見た実父・実母・義父・義母）に子どもの発達障がい特性について話すときの難しさについて教えてください」と、「得られた回答は、筆者が責任を持って管理し、研究以外の目的で使用することはない

こと」といった調査の主旨について説明し、回答は任意であることを伝えた上で、母親に質問紙を配布、回収した。回収については、親の会を介して受け取るか、郵便による返送にて行った。

質問紙の構成：

①フェイスシート

子どもの性別、年齢、学年、診断名の有無の回答を求めた。また、子どもと祖父母が会う頻度について、子どもが小学生の頃に祖父母と同居している（いた）か、別居している（いた）場合どれくらいの頻度で会う（会った）か、続柄ごとに6項目（1：なし、2：年数回、3：月数回、4：週数回、5：ほぼ毎日、6：同居）から当てはまるものに回答を求めた。

②発達障がい特性に関する質問項目

PARS, LDI, ASSQ, ADHD RS-IVに記載されている発達障がい特有の行動特徴を参考に、19の独自の質問項目を作成した。質問項目をTable.1に示す。

a) 項目該当尺度

各質問項目に母親の子どもがどれくらい当てはまるか、4件法（1：当てはまらない～4：当てはまる）で回答を求めた。

b) 話す機会尺度

母親が各質問項目について、実父、実母、義父、義母とそれぞれどれくらい話す機会があるのか、3件法（1：ない～3：ある）で回答を求めた。

c) 難しさ尺度

母親が各質問項目について、実父、実母、義父、義母とそれぞれ話すときにどれくらい難しさを感じるか、4件法（1：感じない～4：感じる）で回答を求めた。

Table.1 発達障がい特性に関する項目

1. 箸、スプーン、フォークの使い方が不器用である。
2. 場の空気や人の気持ちを察して行動することが難しい。
3. 夢中になると、遊びに区切りをつけられない。
4. 仲間とのトラブルやいさかが多く、協調して遊べない。
5. 冗談が通じず、ちょっとした言葉にとられることがある。
6. 集中して物事に取り組みず、注意散漫になる。
7. 偏食がある。
8. じっとしているべき時に手をそわそわ動かしたり、立ち歩いたりする。
9. ルールや順番が守れない。
10. 会話のやり取りが難しい。
11. 音やにおい、温度、皮膚感覚など感覚が過敏であったり、乏しかったりする。
12. 物事や時間、スケジュールへのこだわりが強い。
13. 空想にふけることが多い。
14. 読み書き、算数など学習が難しい。
15. 小さなことでも急に泣いたり怒ったりする。
16. 忘れ物や失くし物が多い。
17. 物が片付けられない。
18. 荒っぽい言葉遣いや行動が目立つ。
19. 大人の指示や注意に従わない。

Ⅲ. 結果と考察

有効回答者数は23名のうち1名は父親であったため、22名(59.5%)であった。

母親の子どもは、男児17名、女児5名で、平均年齢は12.3歳($SD = 2.8$)であった。医学的診断(ASD, ADHDなど)を受けている子どもは15名、未通院のため診断を受けていない子どもは7名であった。未診断の子どもは、Z大学来談時のアセスメントまたは他機関での教育相談において、発達の違いを有していることが示されており、グループセラピーへの参加に至っていた。

分析にはSPSS21.0Jが用いられた。なお、分析に関して、分析対象となった母親でも各質問項目における話す機会尺度および難しさ尺度には、死別等の理由により、各統柄に欠損値が存在した。

そこで、それらを各統柄の平均値で補完することで以下の分析を行った。したがって、統計的検定における自由度が異なる場合がある。以下、Table.2に有効データ数を示す。

Table.2 各項目における話す機会と難しさの有効データ数

	話す機会の有効データ数 (N)				
	2	3	5	11	17
実父	17	15	16	17	17
実母	19	17	18	20	20
義父	13	12	11	12	12
義母	16	14	14	16	16

	難しさの有効データ数 (N)				
	2	3	5	11	17
実父	16	13	15	16	16
実母	19	15	17	19	18
義父	11	10	12	12	12
義母	16	13	16	17	16

1. 発達障がい特性に関する質問項目における高該当群と低該当群の比率の偏り

まず、発達障がい特性に関する項目該当尺度について、項目ごとに、該当得点の3、4点を『高該当群』、1、2点を『低該当群』と分けた。次に、『高該当群』と『低該当群』の2群間で、比率の偏りが大きく、かつ『高該当』群の比率が高い項目を抽出するために、各項目で二項検定を行った。その結果、「2. 場の空気や人の気持ちを察して行動することが難しい。」($p < .01$)、「3. 夢中になると、遊びに区切りをつけられない。」($p < .05$)、「5. 冗談が通じず、ちょっとした言葉にとられることがある。」($p < .05$)、「11. 音やにおい、温度、皮膚感覚など感覚が過敏であったり、乏しかったりする。」($p < .05$)、「17. 物が片付けられない。」($p < .01$)の5項目が抽出された。(Figure.1)

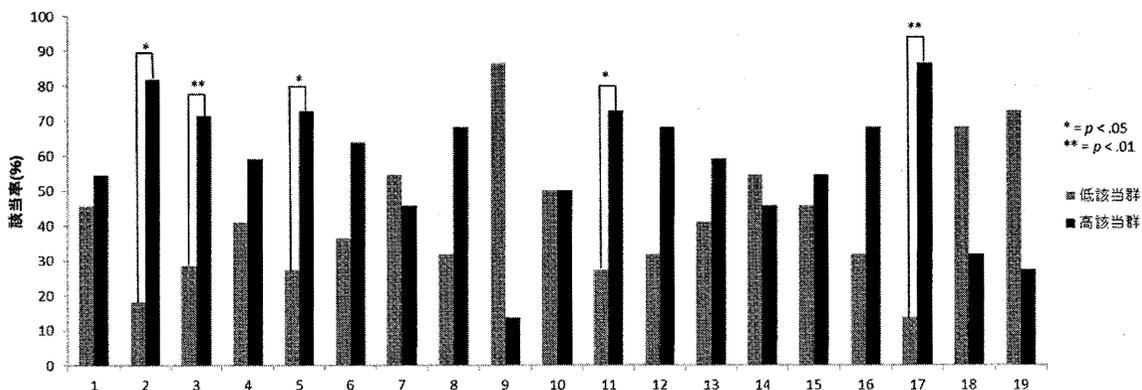


Figure.1 子どもの各項目における該当の偏り

これらはグループセラピーに参加している母親が子どもによく当てはまると思っている発達障がい特性であり、比較的気になっている特性が明らかになったと考えられる。

以下の分析は、この抽出された5項目について行うこととする。

2. 続柄ごとの子どもと会う頻度と難しさの関連、続柄ごとの話す機会と難しさの関連

まず、難しさ尺度について、先に抽出された発達障がい特性5項目の平均値を続柄ごとに算出した。次に、子どもと祖父母が会う頻度と母親が子どもの発達障がい特性について話すときの難しさに関連が見られるか検討するため、続柄ごとにSpearmanの順位相関分析を行った。その結果、どの続柄においても有意差は見られなかった。(Table.3)

同様に、話す機会尺度についても、先に抽出された発達障がい特性5項目の平均値を続柄ごとに算出した。その上で、母親が子どもの発達障がい特性について話す機会と話すときの難しさに関連が見られるか検討するため、続柄ごとにPearsonの積率相関分析を行った。その結果、どの続柄においても有意差は見られなかった。(Table.4)

このことから、子どもと祖父母が会う頻度や母親が子どもの発達障がい特性について祖父母と話す機会といった、祖父母と子ども、祖父母と母親の関わりの多少と、それを話す際の難しさとの間に関連はないことが示された。つまり、祖父母が日々子どもと多くの時間を過ごし、その中で子どもの言動に多く触れたり、母親が祖父母と話し合う機会を多くもったりするからといって、母親が祖父母に子どもの発達障がい特性について理解を

Table.3 続柄ごとの母親の子どもと会う頻度と難しさの相関 (N =22)

		難しさ			
		実父	実母	義父	義母
会う頻度	実父	.16			
	実母		.08		
	義父			.19	
	義母				-.04

Table.4 続柄ごとの話す機会と難しさの相関 (N =22)

		難しさ			
		実父	実母	義父	義母
話す機会	実父	.31			
	実母		.11		
	義父			-.002	
	義母				.05

求めることには難しさが伴うことが示された。これは、岩崎・海蔵寺（2007）や高橋・増渕（2008）が指摘するように、祖父母は障がいに対する知識が少ないこと、発達障がい特性が周囲からすると一見して理解されにくいことが影響していると考えられる。

また、祖父母にとって、孫の障がいやその本質の告知を冷静に受け止めて理解したり、親の接し方や家系に原因があると責めることなく、親や孫のためになるような関わり方を自ら学び直したりすることは、容易なことではない（今野，2009）。祖父母の障がい受容は、決して段階的に進むものではなく、それが促進される要因として、祖父母が子どもと同居しているか否かということよりも、祖父母が障がい名を聞いたことがあること、障がいは成長してもなくなるものではないと認識すること、障がいをもったことは仕方がなかったと理解することが関係している（野尻，2012）との報告もある。本研究で得られた結果には、このような祖父母の障がい受容の要因も影響している可能性があるため、その点については今後検討する余地が残された。

3. 続柄間での話す機会の違い

母親が続柄間で子どもの発達障がい特性に関する項目を話す機会に違いが見られるか検討するために、続柄を独立変数、話す機会得点を従属変数とする被験者内1要因分散分析を行った。（Table.5）

その結果、主効果が有意であった（ $F(2.05,43.08) = 17.6, p < .01$ ）。Bonferroni法による多重比較を行ったところ、実母は実父、義父、義母より、義

母は義父より話す機会が有意に多かった（ $p < .01$ ）。（Figure.2）

このことから、母親が子どもの発達障がい特性について話す機会は、実母が最も多いことが示された。また、実父と義母の間で有意差は見られなかったものの、話す機会得点の平均値を続柄別に見ると、Figure.2より、実父が1.68、義母が1.61となり、わずかではあるが義母より実父のほうが話す機会が多い傾向が窺われた。山田（2010）は、自閉症スペクトラム児をもつ母親に対する祖父母の育児への協力について、義父母に比べ、実父母の方が育児に協力的であると答えた割合が高いことを示している。また、小野・玉井（1992）は、母親は実父母よりも義父母との間で若干トラブルが多いことを指摘している。これより、母親は、義父母よりも実父母の方が育児への協力が得られやすいために、自然と子どもの発達障がい特性について話す機会が増えることや、実父母や義父母との関係性において、余計なトラブルや誤解を避けるために、義父母に対してはあまり話そうとしないことが考えられる。

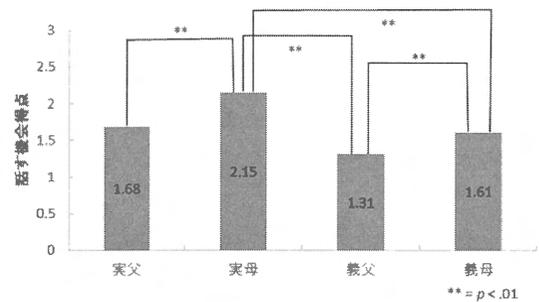


Figure.2 続柄間での話す機会の違い

Table.5 続柄ごとの話す機会得点と分散分析結果

	N	M	SD	F 値	多重比較
実父	22	1.68	.58	17.6**	実母 > 実父, 義父, 義母 ** 義母 > 義父 **
実母	22	2.15	.54		
義父	22	1.31	.36		
義母	22	1.61	.47		

** = $p < .01$

また、実父母間および義父母間で父親より母親の方が話す機会が多かったのは、一般的に母親の方が育児の役割を担う主体となることが多いこと、実父母も義父母も父母間で比べると、母親の方が育児に協力的である割合が高いこと（山田, 2010）が影響していると考えられる。

4-1. 続柄間での難しさの違い

母親が続柄間で子どもの発達障がい特性を話すときの難しさに違いが見られるか検討するために、続柄を独立変数、難しさ得点を従属変数とする被験者内1要因分散分析を行った。(Table.6)

その結果、主効果が有意であった ($F(1.7,35.65) = 8.47, p < .01$)。Bonferroni法による多重比較を行ったところ、義父は実父、実母より、義母は実父より話すときの難しさが有意に高かった ($p < .05$)。(Figure.3)

このことから、母親が子どもの発達障がい特性について説明することは、実父母に対してよりも義父母に対しての方が難しいと感じていることが示された。具・松尾（2005）は、子どもの障がいの受け止めに関して、実父母と義父母で一致せず、

実父母は、母親を慰めたり、実際に援助したりすることが多いが、義父母の場合は、障がいを拒否し、母親に非難的な反応を示すことがあると報告している。また、北村（1999）は、孫の育児をめぐる問題として、祖父母との意見の対立を挙げ、特に母親が義母と嫁、姑の間柄にあたる場合は、両者の関係が不仲に陥りやすいと指摘している。今野（1998）も、義母との関わりにおいては、子どもに対する義母の愛情を認めつつも、義母・子ども関係、義母・母親関係に対する障がい児の母親の見方は、定型発達児の母親たちよりも厳しいものであると示している。このように、実父母はそれまで母親を育ててきた存在であることもあり、その点で、義父母よりは比較的母親を理解しようと努めるのとは対照的に、義父母との関係性は、実父母と比較して対立や遠慮、葛藤などが生じやすく、それによって母親が自分の子どもの子育てについて、言いたいこと、または言わなくてはならないことを率直に言うことが難しいと感じている可能性がある。したがって、今回抽出された子どもの発達障がい特性についても、その続柄との関係性において、実父母よりも義父母の方が話すときに難しさを感じているものと考えられる。

4-2. 発達障がい特性に関する項目における続柄間での難しさの違い

発達障がい特性に関する項目別で、母親が続柄間で子どもの発達障がい特性を話すときの難しさに違いが見られるか検討するために、項目ごとに続柄を独立変数、難しさ得点を従属変数とする被験者内1要因分散分析を行った。(Table.7)

その結果、項目 2, 3, 5, 17では、続柄間の

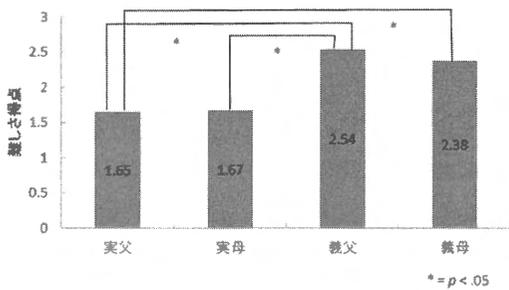


Figure.3 続柄間での難しさの違い

Table.6 続柄ごとの難しさ得点と分散分析結果

	N	M	SD	F値	多重比較
実父	22	1.65	.58	8.47**	義父>実父, 実母* 義母>実父*
実母	22	1.67	.54		
義父	22	2.54	.36		
義母	22	2.38	.47		

* = $p < .05$, ** = $p < .01$

Table.7 各項目における続柄ごとの難しさ得点と分散分析結果

		N	M	SD	F 値	多重比較
2	実父	22	1.94	.95	6.98**	義父, 義母>実父*
	実母	22	1.84	1.17		
	義父	22	2.73	.82		
	義母	22	2.69	1.01		
3	実父	22	1.54	.59	18.5**	義父, 義母>実父, 実母**
	実母	22	1.53	.81		
	義父	22	2.7	.93		
	義母	22	2.77	.83		
5	実父	22	1.53	.87	8.83**	義父>実父**, 実母*
	実母	22	1.59	.93		
	義父	22	2.58	.95		
	義母	22	2.25	1.09		
11	実父	22	1.69	.86	2.48	
	実母	22	1.74	1.02		
	義父	22	2.25	.98		
	義母	22	2.06	1.09		
17	実父	22	1.56	.87	4.68*	
	実母	22	1.67	1.02		
	義父	22	2.42	1.04		
	義母	22	2.13	1.02		

* = $p < .05$, ** = $p < .01$

主効果が有意であった(項目2: $F(1.82, 38.16) = 6.98, p < .01$, 項目3: $F(1.69, 35.44) = 18.5, p < .01$, 項目5: $F(1.79, 37.5) = 8.83, p < .01$, 項目17: $F(1.68, 35.23) = 4.68, p < .05$)。項目11では、有意な主効果は見られなかった。Bonferroni法による多重比較を行ったところ、項目2では、義父、義母は実父より話すときの難しさが有意に高かった($p < .05$)。項目3では、義父、義母は実父、実母より話すときの難しさが有意に高かった($p < .01$)。項目5では、義父は実父($p < .01$)、実母($p < .05$)より、難しさが有意に高かった。項目17では、有意差は見られなかった。(Figure.4)

このことから、母親が祖父母に対して説明をすることが難しい子どもの発達障がい特性が特定の存在することが示された。発達障がい特性によって各続柄に話す際の難しさに違いが見られたことについて、有意差が見られた3項目は、「場の空気や人の気持ちの察しにくさ」、「遊びの区切

りのつけられなさ」、「冗談の通じなさ」といった子どもが人を相手に何らかの関わりをもつ中で難しさが生じる項目であるといえる。そして、それらは、実父母に対してよりも義父母に対しての方が話すことが難しいと感じているという4-1の結果に概ね準拠していた。一方、有意差の見られなかった「感覚過敏・鈍麻」と「物の片づけられなさ」の2項目は、子どもが人ではない物や刺激などと何らかの関わりをもつ中で難しさが見られる項目であるといえる。これらの項目の難しさの対象によって、前述した3項目を『対人項目』、後述した2項目を『非対人項目』とすると、『非対人項目』は、対象が物や刺激であるため、母親にとってその原因やそれに対する対応策が理解しやすいものであると考えられる。一方で、『対人項目』は、人との関わりにおいて子どもが難しさを抱える項目であるため、その難しさがどのような場面で起こりやすいのか、パターンが必ずしも

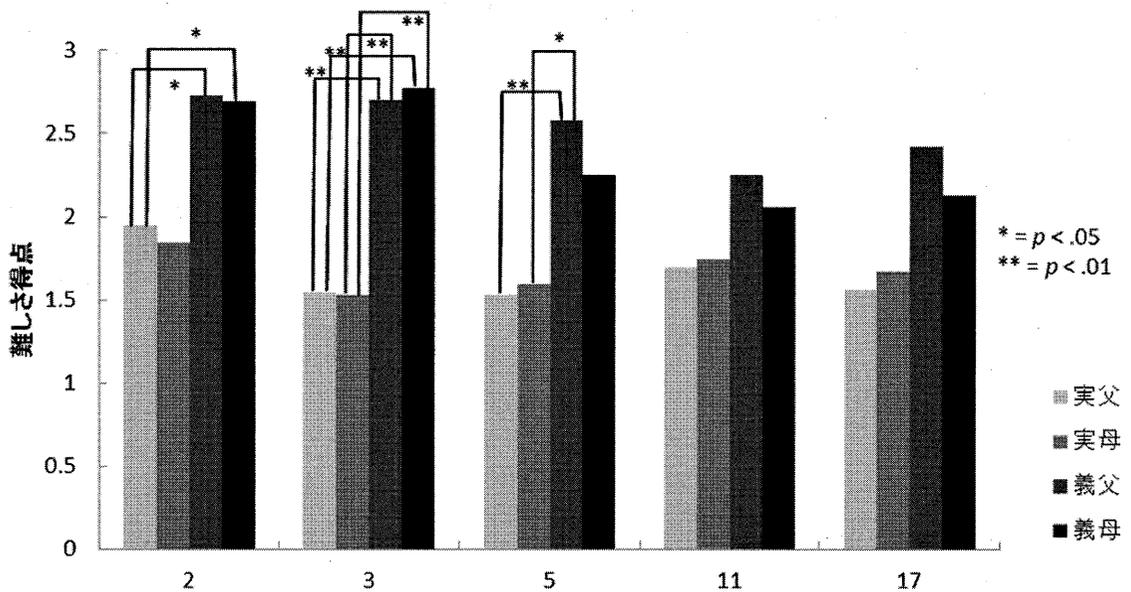


Figure.4 各項目における続柄間での難しさの違い

想定されるわけではないので、その分母親も原因や対応策について理解しにくいものであると考えられる。したがって、母親がその特性について理解しにくい『対人項目』の方が、祖父母に説明する際により難しいと感じることに影響を及ぼしていると考えられる。

IV. まとめと今後の課題

本研究では、発達の偏りを有する子どもをもつ母親を対象に、子どもの発達障がい特有の行動特徴について祖父母と話す時の難しさを続柄間の比較を通して検討することを目的として、質問紙調査を行った。

その結果、難しさの程度に違いを与えている要因には、子どもと祖父母が会う頻度や、母親が子どもの発達障がい特性について祖父母に話す機会といった、祖父母と子ども、祖父母と母親の関わり方の多少といった要因ではなく、母親と祖父母との関係性の問題があると考えられた。母親は、子どもの発達障がい特性について、実母に話す機会が最も多いことが明らかとなった。また、子ども

の発達障がい特性についての説明は、実父母に対してよりも義父母に対しての方がより難しいと感じていることが示された。さらに、その難しさは、どういった特性を説明するかによっても異なり、子どもの抱える難しさに対する母親の理解のしやすさといった視点で捉えた場合に、子どもが人との関わりにおいて抱える難しさについての方が、母親は祖父母に説明することをより難しいと感じている可能性が示唆された。

祖父母は、母親の子育て支援において重要な存在であるが、一方で、母親との関係性の問題や祖父母側の子どもの障がい受容の問題があることが考えられた。本研究では、祖父母側の障がい受容について詳細に検討することができなかつたため、今後更なる検討を行っていく必要がある。また、統計上の課題として、各続柄すべてに回答を得たものが少なく、欠損値が多かつたため、続柄ごとの話す機会得点および難しさ得点を平均値で補完した。このことが結果に影響した可能性もあるため、データ数を増やしたり、1人の回答者に各続柄のうち特定の1つの続柄について回答を求める

被験者間要因計画を検討したりする必要があった。

なお、今後、発達障がい児の家族支援としては、母親に対して直接的に子ども理解の促しや子育て方法の提示をするだけではなく、身近な親族である祖父母との関係において、母親の立場や祖父母の立場を踏まえた上で、良好な関係性の構築と理解を促すための専門的視点が不可欠と考えられる。

謝辞

本研究の実施にあたり、快くご協力頂きましたお母様方に心より感謝申し上げます。

引用文献

- 具建希・松尾直博 (2005). 障害のある子どもをもつ母親ストレスとサポートについて 東京学芸大学教育実践研究支援センター紀要 1, 33-47
- 岩崎久志・海蔵寺陽子 (2007). 軽度発達障害児をもつ親への支援 流通科学大学論集—人間・社会・自然編— 20 (1), 61-73
- 北村安樹子 (1999). 家族における世代間交流—祖父母にとっての孫の存在 厚生福祉 477, 2-5
- 今野和夫 (1982). 子どもと老人：幼児教育における祖父母の役割 秋田大学教育学部研究紀要 教育科学 32, 42-55
- 今野和夫 (1998). 障害児の祖父母についての研究—同居の父方祖母に対する母親の意識を中心に— 秋田大学教育学部研究紀要 教育科学 53, 45-53
- 今野和夫 (2009). 発達障害者支援センターにおける祖父母支援—センターへの質問紙調査を通して— 秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要 31, 61-74
- 野尻恵美子 (2012). 障害児をもつ祖父母の障害受容を促す要因の検討 コミュニケーション障害学 29, 1-8
- 小野恵子・玉井真理子 (1992). 障害乳幼児をもつ母親が家庭内の人間関係において経験するストレス (3) —祖父母との関係を中心に— 日本特殊教育学会第30回大会発表論文集 808-809
- 高橋智・増渕美穂 (2008). アスペルガー症候群・高機能自閉症における「感覚過敏・鈍麻」の実態と支援に関する研究—本人へのニーズ調査から— 東京学芸大学紀要 総合教育科学系 59, 287-310
- 八重樫牧子・小河孝則 (2002). 母親の子育て不安と母親の就労形態との関連性に関する研究 川崎医療福祉学会誌 12 (2), 219-239
- 八重樫牧子・江草安彦・李永喜・小河孝則・渡邊貴子 (2003). 祖父母の子育て参加が母親の子育てに与える影響 川崎医療福祉学会誌 13 (2), 233-245
- 山田陽子 (2010). 療育機関に通う自閉症スペクトラム児をもつ母親の育児ストレスに関する研究 川崎医療福祉学会誌 20 (1), 165-178

Qualities of the relationship conceived by the mothers of children with developmental difficulties with the grandparents
— From the perspective of the difficulties to talk about the features of developmental disabilities —

Saki MARUYAMA, Satoho OGATA, Tomoko SUZUKI, Fumi IWAO
Graduate School of Human-Environment Studies, Kyushu University

Koichi TOYA

Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University

The purpose of this study is to examine the difficulties to talk about the features of developmental disabilities of their own children to the grandparents. The levels of the difficulties were compared in relating to the grandparent's relationships to the mothers by means of a series of questionnaire.

As a result, there were some features of developmental disability which was difficult for the mothers to talk to the grandparents, although there were no relation between the frequency of children's contact with the grandparents and the difficulties for the mothers. Also there were not relations between the frequency of explanation to the grandparents about the features of developmental disabilities and the mother's difficulties. Mothers felt more difficult to talk to the parents-in-law and easier to talk to real mother about features of developmental disability.

From these results, the necessity of professional facilitation for adequate relationship between mothers and grandparents in assisting effective communication between family members was discussed.

Keywords: developmental disability, Mother, Grandparents